

## 第七回

### レフ・トルストイ 『戦争と平和』

この授業も第七回となり、十九世紀もすでに後半に入っています。ドストエフスキーと来ればトルストイということで、西の横綱の登場です。今回は、代表作『戦争と平和』を少しでも読んでみましょう。

#### ロシア文学とナポレオン

ヨーロッパの近代史でナポレオン・ボナパルト(1769-1821)ほど華のある英雄は少ないでしょう。近代文学においても、もっとも人気のある歴史上のキャラクターです。

フランス革命の申し子か、裏切り者か？ 一介の将校が革命軍の司令官になり、国民の英雄となり、ついには諸民族の皇帝にまでなりおおせた生涯は、そんな問いを突きつけます。生まれの身分でなく個人の才能と意志、そして天運によってヨーロッパの頂点に登り詰めたナポレオンはまさしく自由の理念の体現者であり、革命の申し子と呼ぶにふさわしい。その反面、皇帝、すなわち「諸王の王」の座に就いたのは平等の理念を踏みにじるもので、革命への裏切りと言われてもしかたありません。

いずれにしても、ナポレオンがいたからこそ、フランス革命とその理念が全ヨーロッパに影響を及ぼしたと考えてよいでしょう。彼の対外的勝利は革命の正しさの証として、多くの国々に改革と変化を強いることとなりました。近代の特徴の一つに「諸外国への波及力」がありますが、ナポレオンの遠征はその

始まりです。

ナポレオンの衝撃を最初に受け止めたのはドイツ人です。ゲーテやベートーヴェン、フィヒテなど当代を代表する芸術家や学者は、自分たちを倒した若き英雄から尽きせぬインスピレーションを得ました。ベートーヴェンが交響曲第三番「英雄 (Eroica)」をナポレオンに捧げたが、彼が皇帝の座に就いたことに怒って献辞を取り下げたというのは日本の小学生も教わるエピソードです。

また、哲学者フィヒテはドイツの敗北を受けて『ドイツ国民に告ぐ』(1808)を書き、なぜ自分たちは負けたのかと同胞に問いかけました。彼の答えは、フランス人は「フランス国民」として一つにまとまったのに、自分たちドイツ人はそうしなかったからだというものです。ご存知のように、三十年戦争(1618-1648)後、ドイツは多くの小国に分裂しました。ドイツ人が一つにまとまって「ドイツ国民」になること——それがこの敗北から学ぶべきことだとフィヒテは主張しました。その際、何をもって民族=国民(Nation)の基準とするのか、という問いに彼は画期的な答えを示します。ドイツ語です。言語こそが民族=国民(Nation)を創り出す。したがって統一的プログラムに基づくドイツ語の初等教育を広めることが急務である——こうした考え方は他の後発国にとっても大きな意味を持ちました。一つの民族が一つの国民をなす、いわゆる国民国家(nation state)の形成が「近代のプロジェクト」となるに当たって、いかにして民族=国民のアイデンティティを創り出すかが後発国のリーダーたちの共通課題となったのです。

「敗者の想像力」という言葉があります。戦いに敗れた者は勝った者より多くのことを考え、次世代につながる思想を生み出すという意味でしょう。『ドイツ国民に告ぐ』はまさにそうした敗者の想像力の書でした。

さて、ナポレオンの影響はドイツよりさらに東方に拡がりました。ポーランド人は彼を救世主として迎えます。ポーランドは歴史を誇る由緒正しい王国でありながら、十八世紀後半、ロシア、プロイセン、オーストリアに三度の国土分割を強いられ、国家として消滅してしまいました。国家再興はポーランド人の悲願であり、ナポレオンは「ワルシャワ公国」というかたちで応えます(1807年)。ポーランド人がナポレオンに命運を託し、1812年のロシア遠征に十万人もの将兵を差し出したのも、祖国の完全復活を勝ち取るためでした。

そのロシアはと言うと、ナポレオン率いる六十万の連合軍に、敗北と撤退を重ね、ついにはモスクワ占領まで許します。しかし広大な国土と厳しい冬、そしてロシア民衆のパルチザンの力で勝利を収めます。これは二十一世紀の今もロシア人の誇りです。

しかし、文明の華、近代の先達と仰いできたフランスに勝利したことは、ロシアにとってプラスだけではありませんでした。勝利者としてパリに乗り込んだとき、ロシアの将兵たちが目にしたのは、やはり彼我の大きな隔たりだったのです。その13年後の1825年、ペテルブルグで貴族による反乱（デカブリストの乱）が起きます。これは憲法や国会などの政治的近代化を求めた、ロシアで初の革命的試みでした。あっという間に鎮圧されてしまいました。

このように、ロシアに多くの傷跡と次世代への蠢きを残したナポレオンですが、文学への影響はどうだったのでしょうか。ロシア文学ではナポレオン・イメージが花を咲かせました。超人的意志、選ばれた人間、社会的規範を踏み越える実行力を持つ、強い「個人」を描くとき、しばしばナポレオン・イメージが用いられたのです。代表的なのはプーシキン『スペードの女王』の主人公ゲルマン、レールモントフ『現代の英雄』のペチョーリン、ドストエフスキー『罪と罰』のラスコーリニコフなどでしょう。

なぜロシア文学にとってナポレオン像は特別な意味を持ったのでしょうか？西欧的近代へのアンビヴァレンス（相反する感情）が集約される形象だったからです。近代的理念を掲げ、我が物顔に乗り込んできたフランスに自分たちは勝利した。それは後発国コンプレックスを解消し、近代というものを相対化するのに役立ちました。しかし「敗者の想像力」があるように、「勝者の憂鬱」というものもあるでしょう。勝ってなお相手を羨ましく思う気持です。実際、1812年以降もロシア人のフランス文化への憧れは消えず、近代の影響も失われなかったのです。ナポレオンもまた、倒れた偶像である一方、近代の輝きを象徴する人物として、ロシア文学のなかで生き続けました。

## 近代小説史上の『戦争と平和』の位置

ドストエフスキーについて、二十世紀の世界文学にもっとも影響を与えた十九世紀の作家だと申し上げました。ではトルストイはどうでしょうか。

『戦争と平和』にしばってお話すると、「十九世紀に書かれたもっとも偉大な

長編小説」と言えるでしょう。ロシア文学だけでなくヨーロッパ文学、世界文学に話を広げても通用する命題だと私は考えています。

「ああ、ロシア文学びいき!」という皆さんの叫び声が聞こえてきます。たしかに鼻真目ではあるでしょう、何しろロシア文学の授業ですから。ただしご注意くださいいたきたいのは、私の主張はたんなる文学的好みでなく、「長編小説とは何か」という議論に基づいていることです。この授業でお話してきた、「自国の近代化の諸問題を描く」という長編小説の使命を基準にすると、『戦争と平和』ほどこの使命に正面から取り組んだ作品は他に例がない、と申し上げたいのです。

そこまで言うならどんな小説だよ、と思われたことでしょう。そこでさっそく作品全体のあらすじをご紹介しますことにします。もちろん、小説の価値はあらすじで決まるわけではありませんが、まずは全体のイメージを持っていただくのがよいでしょう。

〔『戦争と平和』全体のあらすじ〕時は1805年のロシア。破竹の勢いでヨーロッパを制覇しつつあるナポレオンを食い止めようと、ロシアはオーストリアと組んで戦争の準備を進めている。戦地に赴くアンドレイ・ボルコンスキー公爵は、上流貴族界の花形でありながら、平凡な夫婦生活と社交界に飽き飽きし、ナポレオンのような名誉をひそかに夢見ている。彼の親友ピエール（ピョートル）・ベズーホフは大貴族の庶子（正妻でない女性が生んだ子）だが、父の遺言により一夜にしてロシアでもっとも裕福な貴族となり、絶世の美女エレン（エレーナ）を妻とする。この二人の男性を軸に物語は進む。

三帝会戦とも呼ばれたアウステルリッツの戦いはナポレオンの大勝利に終わる。アンドレイ公爵も戦場で倒れるが、奇蹟的に一命を取り留める。ようやく領地に帰りついたところ、若妻が初産で命を落とす場面に遭遇する。自分が求めていた名誉が空しいものに思え、軍を退役し、領地に引き込もる。

ピエールもまた妻との不和に苦しみ、人生の意味を求めてフリーメーソンに入会したりもするが、まだ迷いの中にいる。しかし彼は本来、明るく善良な人物なので、心ある人々には認められ愛されている。

アンドレイ公爵はナターシャ（ナターリヤ）・ロストワという若い女性に出会い、ふたたび生きる希望を持ち、官界でも活躍し始める。ところが、ナター

シャは若さゆえに別の男性と駆け落ち騒ぎを起こしてしまい、婚約は破談となる。

政治の世界はというと、アウステルリッツの戦い以後続いていた平和にふたたび暗雲がたちこめる。1812年、ナポレオンは六十万の連合軍を率いてロシアに進撃する。アンドレイはふたたび従軍し、戦地で重傷を負う。ナターシャと偶然再会し、彼女の過ちを許し、生と死を見つめつつ、この世を去る。

ロシア軍の総司令官クトゥゾフ將軍は、退却戦術を重ね、敵軍の体力を削ぐことに努める。彼は旧都モスクワをナポレオンに明け渡す。しかし講和要請には一切応じず、厳冬と食糧難に苦しむナポレオン軍を撤退に追い込む。ロシア軍は追撃に転じ、フランス軍を撃破してゆく。

一方、ピエールはモスクワ占領時にフランス軍の捕虜となり、撤退する軍に引き立てられ長い道を歩いていた。プラトン・カラターエフという一風変わった農民と親しくなり、彼の民衆的知恵や生き方に心を揺さぶられる。

ピエールはロシアのパルチザンに解放され、ペテルブルグに戻る。社交界でさんざん浮名を流した妻はすでにこの世になく、彼は親友アンドレイのかつての婚約者ナターシャと新しい家庭を築く。

アンドレイ公爵の忘れ形見、ニコレンカは叔母夫婦に育てられている。お父さんのような立派な人になるんだ、と少年が一人つぶやいているところで物語は終わる……。

すみません、長くなりました。これでもものすごく端折っています。複数の主人公と家族の物語があるときは並走し、あるときは交差しながら、十九世紀前半のロシア社会の「戦争と平和」を大スケールで描き出しています。

この作品は長編小説というジャンルの可能性を、後発国文学として最大限に発揮したものと言えるでしょう。近代的理念への憧れと疑い、民族＝国民(Nation)の自覚、先発国と後発国、貴族と民衆、都市と農村、個人と社会、成功と幸福などの思想軸が立てられています。

その結果、『戦争と平和』の世界観は全体として「保守的」なものになりました。ここでいう保守的とは、近代の「前に進もうとする力」に対して働く「留まろうとする力」のことです。二つの力は作用と反作用の関係にあります。ある国に近代が導入されるとき、かならずこの二つの力が発生します。トルスト

イは西欧的近代への称賛と批判のあいだで揺れつつも、最終的にはロシアがヨーロッパと同じしかたで近代化することはできないし、またすべきでもないという立場に立って、ロシア社会を描いたのです。

後発国の長編小説は、多かれ少なかれ「保守的」にならざるを得ません。作家たちは多くの場合、西欧的近代へのアンビヴァレンスを抱き、自国の近代化への疑問を持って小説を書くからです。もし近代化万歳であるなら、その人はそもそも小説など書かなかったでしょう。近代化を推進するための啓蒙や学問、実業に励めばよいのですから。

急激に近代化する社会のなかで生きにくさを感じる人々が小説を書き、そして読んだのです。

### 『戦争と平和』から

ここでは作品冒頭の場面を見ていきましょう。あらすじ続きですみませんが、限られた紙数でこの大長編の魅力を少しでもお伝えできればと思います。

〔第一章冒頭のあらすじ〕アンナ・シェーレルの夜会にはペテルブルグ上流貴族の選りすぐりだけが招かれる。貴族界の大立者ワシーリー公爵とその子どもたち。今を時めくアンドレイ公爵と若妻リーザ。大貴族の庶子ピエール・ベズーホフ。そしてフランス革命後、ロシアに亡命してきたフランス貴族の顔も見える。当然、話題の中心はナポレオンである。ピエールはナポレオンへの称賛を無邪気に語って亡命貴族たちの冷笑を買い、女主人をハラハラさせる。彼は庶子だったこともあり、社交界のルールをわきまえない「野生児」なのだ。だがアンドレイ公爵はピエールの善良さを愛し、彼にだけは気難しい心を開く。夜会の後、ピエールを自宅に招き、なぜ自分が華やかな社交界や身重の妻を置いて戦場に赴くのかを話して聞かせる。結婚などをして自由を手放してはいけない、と年下の友人に諭すのだった。

『戦争と平和』の昔の翻訳では、冒頭のアンナ・シェーレルの台詞がカタカナで記されていて読者は驚いたものですが、これは原文がフランス語であることを示しています。『戦争と平和』に登場する貴族たちはしばしばフランス語で話すのです。ナポレオンその人も登場しますが、もちろんフランス語で話しま

す。「フランス語で話している」という設定ではなく、本当に台詞がフランス語で書かれているのです。そのため原書では、フランス語が読めない読者のためにロシア語訳の注がついています。

外国語で始まる小説というのは珍しいと思われるかもしれませんが、じつは近代小説のフォーマットに則っています。お話してきたように、後発国は新しい理念や制度、技術を先発国から輸入するところから近代化をスタートさせます。その際、輸入した文物を理解するための外国語の知識や翻訳が重要な役割を果たします。近代化の推進者が多くの場合、精力的な翻訳者でもあるのはそのためです。有名な例としてはロシアのロモノーソフ、日本の福沢諭吉、中国の魯迅らが挙げられます。

「外国語を使って初めて表現できる思想や感覚」があるという発見は、後発国の知識人たちの共通体験です。彼らは自国語と外国語のあいだを行き来しつつ、新しい思想や感覚を見出し、言葉にしていたのです。

そのため、後発国の小説では外国語が出てくる場面がとても多い。そういう場面がまったくない小説の方が珍しいくらいです。『戦争と平和』でフランス語やドイツ語がちりばめられているのは、たんに「歴史的な本当らしさ」を出すためではなく、近代小説は多言語的であらざるを得ないというトルストイの洞察に基づいているのです。

さて、トルストイといえればかならず登場するのが「リアリズム」という言葉です。ツルゲーネフやドストエフスキーにも増してリアリズムを完成させた作家という評価が確立しています。しかし、具体的に彼の描写のどういう点が「リアリスティック」なのかということになると、これがなかなか難問です。『戦争と平和』の冒頭場面に関していえば、次の二点を指摘できるでしょう。

(1) 人間の顔立ち・表情の描写 登場人物の容姿・外見をこと細かに描く技法は、リアリズム小説が高度に発達させたものです。それ以前の芸術潮流、たとえばロマン主義や古典主義では、リアリズムほど細かい描写はほとんどありません。人間を描くときに、その容姿、とくに顔立ちや表情を細やかに描くべきだという考え方は比較的新しいものです。

『戦争と平和』の冒頭場面では、アンドレイの若妻リーザの口許の描写が有

名です。引用してみましよう——「薄いうぶ毛がかすかに黒ずんで見えるその可愛い上唇は、短くて歯とすれすれだったが、それだけに唇の開く格好は可愛く、また、たまには下へ延びて下唇と合わさる格好はますます可愛かった<sup>26</sup>」。

こういうのが「トルストイ的リアリズム」の典型とされるのですが、考えてみると不思議な描写ではないでしょうか？ なぜ女性の口許を細かく描くと、描写がリアルになるのでしょうか？ この後もリーザが出てくるたびに口許の描写がくり返されますが、人間の描写を身体の一部ですませることに違和感を覚える読者もいるでしょう。

もう一つ例を挙げます。ピエールが社交界にはそぐわない(空気を読まない)熱弁をふるい、逆に周囲から突っ込まれて答えられなくなる場面です——「ムッシュ・ピエールは誰に返事していいかわからず、みんなを見回して微笑していた。彼の微笑は、ほかの人のそのように、何か含むところのある微笑ではなかった。彼の場合は反対に、微笑が浮かぶと同時に、たちまち真剣な、若干気難くさえ見える表情が消え去り、代わりに子供っぽく人なつこい、少々間の抜けた感じさえする、許しでも乞うような表情が現れるのだった<sup>27</sup>」。

リーザの口許ほどの違和感はありませんが、ここでも「子供のような笑顔」によってピエールの人間性を表現しようとしています。このように、トルストイ文学では人間の顔立ち・表情の描写が重要な意味を持ちます。なぜでしょうか？

主人公の顔立ちは、いわばインターフェース(接続面)の役割を果たしていると考えられます。何と何のインターフェースかといえば、見る者(作者)と見られる者(主人公)、細部と全体、外面と内面を接続し、相互変換しています。顔立ちという一つの対象の描写に、同時に二つの面が現れているのです。

リアリズム小説を読むとは、結局、こうしたインターフェース的描写を読み解くということです。リーザの口許の描写が、彼女の精神的幼さや保護されるべき弱さにつながっていること、またピエールの子どもっぽい笑顔が彼の善良さ、魂の健全さにつながっていることの気づきが読者に求められています。こ

---

<sup>26</sup> レフ・トルストイ『戦争と平和』上巻、北御門二郎訳、東海大学出版会、1978年、7頁。

<sup>27</sup> 同上、23-24頁。

こにリアリズム小説を読むことの醍醐味、つまりは「面白さとしんどさ」があるのです。

(2) 善人・悪人の違いの明確さ 『戦争と平和』の冒頭場面を読むと、登場人物一人ひとりに対する作者の評価が明確であることに気がつきます。ピエールは善い人間であり、アンドレイはそれに次ぐ善良さと誠実さを持っています。それ以外の人物はほぼ全員、俗悪、さもなければ凡庸です。この後登場する人物たちも同様で、作者から見て「どれくらい善い人間か」が最初からはっきり示されています。しかもその評価はほとんどの場合変わりません。

もしリアリズムが「人間や事物を客観的に描く」芸術様式だとすれば、善人と悪人がこれほど画然と分かれているのはおかしくないでしょうか。現実でも善人と悪人の見きわめは難しく、見る立場によって評価も変わります。小説家も自分の好悪を抑制し、中立的に、ないし多様な観点から人間を描くべきではないでしょうか。

ところがそうではないのです。ツルゲーネフ『あひびき』を思い出してみると、あの短編でも語り手(=作者)は自分の評価を最初からはっきり、かつ異論を許さぬ調子で示していました。アクリーナは好ましい善良な娘、ヴィクトルはいけ好かない浅薄な若者という評価が下され、それに基づいて彼らの描写が続きました。その点、トルストイのリアリズムはツルゲーネフのそれに似ています。ドストエフスキーの場合も事情は変わりません。つまり、リアリズム作家たちは自分たちの主観的評価を固く信じ、それに基づいて人間や事物を描くのです。なぜそれが「リアリスティック」なのでしょう。

この問いは、近代における人間主観の問題とつながっています。近代人にとって主観こそが認識と行動の出発点です。言いかえれば、「わたし」を純粹に突きつめることが知的にも倫理的にも重要な要請となります。私たちが日々、「おまえはどう思うんだ?」とか「あなたがどうしたいかが大切よ」などと問い詰めたり、問い詰められたりしていないでしょうか。

このような意味で、トルストイたちが自分の主観的評価に徹して人間を描いたことはすぐれて近代的な戦略だったと言えるでしょう。彼らは、自分の主観が描写対象の客観と接続することを自らの芸術に課したのです。トルストイがピエールに与えた肯定的評価(=主観)は、ピエールのロシア性、つまりロシ

ア民衆との結びつき (=客観) と接続しています。彼の笑顔 (=外面) が彼の人間性 (=内面) と接続しているように。また、彼の人生 (=部分) がロシアの運命 (=全体) と接続しているように。

リアリズム作家は主観と客観、外面と内面、部分と全体のインターフェース (接続面) の集積体を作ることに創作的情熱を燃やしました。その集積体こそ、リアリズム的描写と呼ばれるものに他ならないのです。

### 読書ガイド

レフ・トルストイ『戦争と平和』(全3巻)、北御門二郎訳、東海大学出版会、1978-1979年。

レフ・トルストイ『戦争と平和』(全6巻)、藤沼貴訳、岩波文庫、2006年。

レフ・トルストイ『戦争と平和』(全6巻)、望月哲男訳、光文社古典新訳文庫、2020-2021年。

加藤典洋『敗者の想像力』集英社新書、2017年。

曹泳日『世界文学の構造 韓国から見た日本近代文学の起源』高井修訳、岩波書店、2016年。

番場俊『〈顔の世紀〉の果てに ドストエフスキー『白痴』を読み直す』現代書館、2019年。